

愛の侵略——マザー・テレサとシスターたち——

〔1994年10月4日
日本カトリック短期大学連盟
理事長学長研修会講演より〕

竹内 敏 晴（南山短期大学教授）

竹内でございます。私は南山短大にお世話になっておりますけれども、キリスト者ではございませんので、最初に大橋学長から「話をせよ」と言われたんですけれども、信仰を持たない者がみなさまのような方々に何をお話ししたらいいのか大変困りました。ですから一番最初に、私がキリスト者に対するお願いというか、そういうことを先ず少しお話をして、それから、演題の通りとなるかわかりませんが、マザー・テレサと言いますよりも、マザー・テレサを素材とした芝居をやったことについてですね、お話しを致したいと思います。

皆さん方はどのようにお考えになっているかわかりませんが、日本の一般の庶民にとっては、少なくとも私の少年時代においては、キリスト教は全く無縁のものでした。そういうものがあるということさえ知らなかったのです。その頃は戦争中でありましたから、キリスト者が弾圧されていて人目に立てなかった時代であったという理由も勿論でございますけれども。社会鍋も幼い頃名だけは聞いた覚えがありますが、見たのは戦後になってからでした。

で、私は戦後になって西洋文化に触れてから、キリスト教という宗教の力の大きさについては、いろいろと考えさせられ、感じたことがありますけれども、しかし信仰という面に関しては、むしろ私は仏教、それも浄土真宗の親鸞の教えにひかれておましてキリスト教とは無縁でした。ある時期に、ある人から、カトリックにおける、人間の〈傲慢〉ということについての考え方を教えられたことがあり、それが私の中に強いしるしを残しました。それから、次第に心にかかることが出て来まして、縁あって南山短大にお世話になるようになったわけであります。

私は敗戦の時に二十歳でありました。その当時、高等学校の寮におりました。

東京でございますが。冬から春にかけては空襲、空襲で毎晩のように真夜中に飛び起きて。今の駒場の東大教養学部、正面に時計台があります。あそこの頂上は、今は登れませんが、その頃は登れたんですね。煙突みたいになっていて、螺旋階段を登りまして一番上に行く。そこに地図と磁石を置いて東京を見渡している。わかると憲兵隊に引っ張られますけども、毎晩の空襲で、今日やられてるのは、あれは浅草の方らしい、あの火は芝の方が、いつ、こっち、渋谷の方が爆撃されるだろうと寒さにふるえながら見張っているような日々がありました。

その頃に、密かにと言うと、今聞くとおかしいんですが、キリスト教に入信される方がおられました。私より少し年齢が上の人々です。私と同じ頃の世代だと、今道友信さんは幼い頃からだと思いますが。粕谷甲一神父、あの方は多分戦後だったかと思います。

ある時、空襲下ですから灯がつけられない。真っ暗闇の夕暮です。まだB29は来ません。冬、コンクリート造りの部屋で寒いもんですからね、なんとか、少しずつ木切れを集めてきて、火鉢のようなものに火を作って暖をとっている。どうして、ああいうふうになったか記憶にありませんが、5・6人の友達と話し合っておりまして、その中に今、北海道の家庭学校というところの校長をやっておられる谷正恒さんとおっしゃる方がおられました。

これはプロテスタントの方なんですけども、何十人ものいわゆる非行少年を引き受けて、一緒に生活をしながら何十年も指導しておられる方です。彼に向かって一人の男が、彼がキリスト教の信仰に入ったということを聞いて問い詰めているわけですね。

その中で一つだけ私が覚えていることがある。それは、イエスが水の上を歩いたということがバイブルに書いてある、そんな非科学的なことはありえない、と彼が言い出したのです。

それで、「あなたはそれを信じますか。」

そしたら、谷さんが、ちょっと黙って、それから静かな声で「信じます。」と言ったんですね。それっきりだれもなんにも言わなかった。それが、私には深く心に残っています。そんな無茶苦茶なことはないと、実を言うと半分思っている。しかし、片方で何かわからないけれども、そこをはずしたらば、大きく違ってしまう何かがあるといった感じがあるわけです。そういう言葉が真っ暗な冷たい部屋の中で交わされた。爆撃そして死ということが目の前にある。問いかける方も答える方も真剣勝負だった。そういうことが昭和20年の戦争の終わる直前の真っ暗闇の少年たちの間にあったわけです。

その頃、キリスト者になるということは、天皇ということに向かい合わなければならないということが当然あるわけでありまして、実際、憲兵隊が入って来て反戦思想の形跡を調べられたりしている時ですから、なかなか大変なことであったと思いますが、その時期、私の先輩で何人か入信されました。今も牧

師の仕事をしていらっしやる方もいらっしやる。私なんかは父親が軍国主義的な人でありましたから、そういう動きは、尊敬に近い目で見えていたけれども、縁は遠かったのです。

それが、敗戦で世の中はガラガラッとひっくり返った。そうして私などは一体物事をどう見たらいいのかわからないという有様でした。

ヒューマンイズムとか民主主義とかって言う言葉が主にアメリカから入って来ますけれども、そんな言葉自体今まで聞いたことがない。何だかわからない。人間の尊厳なんていう言葉も随分後になって聞くわけですけどね。ただ、軍国主義と天皇の戦争責任という言葉は、はじめて聞くけれども実感としてまぎれなくわかった。

そういう時期に、私の友達たち — というより若者たち一般ですが — は雪崩をうって2つの方向へ行きました。

一つは、少数派であります但しキリスト教に入信する方向です。

もう一つ、これが多数派であります但しマルキシズムに走った。共産党ないしはその周辺の団体に入って社会改革の方向へ挺身する。

私はどちらにも動けないで、一体人間とは本来どう生きるべきなのだろうか、日本人とは何なのだろうかということをやウロウロ考えておりました。私の戦後はそういうふうが始まってそれからもはや50年たったわけであります。

それで、私は今、戦後50年たちまして一番胸にこたえますことは — その当時はとにかくいろんな不満や飢えや生活の苦勞がありましたけれども、とにかく新しい時代が来る、人間が新しくならなければいけない、で、人間を尊重して、戦争を拒む、新しい世の中を作っていくんだというふうに、青年たちは思いきめて出発したわけであります。ヤミでやっそこ食いつないでいたという状態で、ヤミ屋をやりましてね、儲けたという仲間もいましたが、そういうような中で出発したわけでありますけれども。

戦後50年たって、今、教育の場にかかわっている人間として思いますことは、この間に人間の欲望は解放されたということは確かにあるわけです。戦前の封建的な精神主義と言いますか、そういう束縛から解放されて人間の欲望はよみがえった。

しかし、金を儲けて、物の豊富な生活をして、そこそこ出世してという、そういう世俗的欲望を越える価値というものを — 私たちは戦後の出発の時にはそういう志を持っていたはずでありますけれども — そういうものを次の世代、あるいはその次の次の世代にちゃんと手渡せたかということを思いますと、全くそれはだめであったと思う。今、これは私たちの世代の責任であると言わざるを得ないのです。近頃、それが一番に胸にこたえております。

皆さんよくご存知のルカによる福音書の第10章ですね。マルタとマリヤの話であります但し、これを塚本虎二さんの翻訳で読ませていただきます。

『マルタは進みよって言った。「主よ、姉妹が私だけに御馳走のことをさせ

ているのを、黙って御覧になっているのですか。手伝うように言いつけてください。」 主が答えられた。「マルタ、マルタ、あなたはいろいろなことに気を配り、心をつかっているが、なくてはならないものはただ一つである。マリヤは善い方を選んだ。それを取り上げてはならない。』

「なくてはならないものはただ一つである。」このことばは、共同訳では「必要なものは」というふうに訳されておりまして、他のも大体そういうふうですけれども、私は、この「なくてはならないもの」という翻訳が好きでありますので、それを読ませていただいております。「なくてはならないものはただ一つである。」ということと言えるのはキリスト者だけかもしれません。しかし、人間には、むき出しの欲望というものを越えた価値というものがあるんだということについては、しかと、それを若い人々に — ことばというよりは行いによって — 伝えてこなければならなかったはずなんです。けれども、伝えられなかったのは当然でありまして、そういうものを持ってなかったと言うよりほかはありません。

そういう意味で、戦後50年についてはいろいろな論説があるわけでありませうけれども、そのことが私たちの世代、あるいはもっと広く言えば日本人というものの根本的な弱さであると考えます。それに対して、そのことを、その非を問い詰めることが出来るのはキリスト者だけではないかというふうに、私はある時期から思いつめております。

田中正造という方をご存知かと思いますが、私は林竹二先生という元宮城教育大学の学長をされた方と50歳代の10数年間をずうっとご一緒に仕事をさせて頂いた。被差別部落出身者の多い定時制高校へ授業に入ったんですけども。その先生と知り合いになりましたのは、「ぶどうの会」という劇団におりまして、そこで田中正造の芝居をやったことからなんです。

田中正造という人はその当時は知られてなくて、資料もろくになかった、なかなか見つからないような状態でありました。1960年代の最初の頃です。

で、彼を素材とする芝居を作るために彼の膨大な日記などをずうっと読んでおりまして — その当時は、今みたいな完備した全集などは出ておりませんでした — 。それを見てびっくりしたのは、彼が華々しく活躍していた帝国議会の代議士だったころじゃなくて、谷中村という、政府によってつぶされてしまった小さな村へ入って、わずか19戸の農民と一緒に暮らしはじめてからの日記です。村人たちがどんなにすばらしい人々か、ということがこまごまと書いてあります。それ以外はほとんどと言っていいくらい神のことを書いています。神とは何かとか、神がこうであるとか、自分はこう考えるとかって、延々と。終りの頃に、「キリスト、今いづくにあるか」と悲痛とってよい文字を記しています。

亡くなった時に彼は、ちっぽけな袋を一つだけ持って旅先で死ぬんですけども、その袋の中には大日本帝国憲法とマタイ伝を綴り合わせた本が1冊しか入っ

ていない。あとは鼻紙と書きかけの原稿もあったようでありませけれども、小石が2つ3つと、それだけなんです、彼が死んだ時には。

彼は新井奥邃という人の導きによってバイブルを知るわけでありませけれども、しかし、彼はマタイ伝1冊しか読んでない。しかし、それを本当に読みぬいているというか。新約全書を贈ろうというキリスト者があったんですけれども、それを断っています。

新井奥邃という人は、アメリカで長くキリスト者のコロニーで仕事されていた人でバイブルとは仕事師の手帳であるという言い方をした人なんです。手控えにかきつけてあることを、すぐとり出して考えてみる、というのでしょうか。

内村鑑三とかいろんな偉い先生が正造の周囲にはいたわけですが、そういう人々には支援をしてもらえけれども、しかし、信仰への導きということは、彼らによっては得られなかった。その正造が新井奥邃によって導かれたということは、随分いろんなことを考えさせられるわけですが、それは、ちょっと余談です。

そして日記の最後の方に、自分はいろんなことを学び見て来たけれども、全部だめだ。いろんな日本の思想は全部だめだと言います。彼は大和魂とは奴隸根性である、と言い切る人ですから。そして「この上は、新鮮なる宗教をもってするよりほか、日本を救う道はない。」と彼は書いているんです。彼の絶望と見すえていた方向というものは、まことにはっきりしていると思います。

彼はキリスト者としては世の中に認められてないと思いますけれども、その思いが私の胸の中に残りまして。で、キリスト者というものに対して、私はある大きな期待を持ち続けて来たわけでございます。

特に私が思いますのは、天皇制に対しての向かい方があります。戦時中には天皇とキリストとどっちが偉いんだ、というような責めたてられ方をして苦しんだという人も沢山おられたようでありませけれども。天皇制というものに対して、きっぱりとした態度がとれる。最近では長崎の市長の本島さんという方がおられますが。日本人の心の持ち方の根っここのところをずうとつきつめて行くと、天皇制っていうものが成り立って来る歴史的な基盤というものは、決して、ただ政治的なものだけではなくて、私たちの心情的な歴史の中に土壤があると思われませ。ですからそういうものと、ちゃんと向かい合うということは大変難しいことだということを、この頃痛切に思うんです。自分が自分を問い詰め、これを批判し越えてゆかなくてはならない。その目を示し、育てていただきたい、と願うのです。

人間には欲望を越える大事なものがあるということを、私たちの世代がはっきり伝えられなかった無力さの理由は、一つにはそこにある。人間としての責任という考え方が成り立ち切れていないということですね。天皇の戦争責任という問題を声を上げてきちっと成り立たせるという力が、私たちの世代に —

勿論個人としては立派に発言して来られた方が沢山おられますけれども — なかったということが、非常に大きな戦後の責任だというふうに思っているわけで、そういうことを全部ひっくるめて、キリスト者に対して、日本のキリスト者に対してお願いをしたいというか、期待をするという思いがあったわけであります。ちょっと気持ちをしゃべりすぎましたが。。。。

私が、前におりました仙台の大学を辞めてから、こちらの大学へお世話になったことについては、いくつかの理由がありまして、その一つは人間関係科という科が非常にユニークなものだということがあります。

で、もう一つはカトリックの学校だったということです。私は、全く自分が無縁であっただけに、どういうことで勉強出来るかわからないけども、とにかくカトリックの学校にお世話になってみようというふうに思って参ったわけでございます。

ですから、学長という方々に何かお話をするというのは、本当に恐縮なんです。そこでですね、私は来て、実は意外な思いを致しました。何かというと、外にいたものですからね、まっ、カトリックの教育っていうのはどういうんだろうと思ってやって来たわけですよ。

そうすると、はて、これは一体、一般に言われてるヒューマンイズムと何が違うんだろうということが、よく見えないわけですね、私は。そうすると自分は、今までと同じように、ここでやってればいいんだろうか。もう一つ、今までの自分を越えるような何かに付き合って勉強して、先へ行くということになりたいたいだけども、それは一体何だろうか。ということが、実はよくわからなくなったということが率直に言うとあります。それは、日本の教育状況の中でいろんな問題が重なりますから、そのことについて一言では言うことは出来ませんけれども。

簡単に言いますと、日本では、どこでも、「自然にこうなるといいですね。」という話になるんですよ。何でも自然に成り立つことが非常に尊ばれる。それで仲よく、けんかしないで。まっ、平和っていうことは結構ですけども、平和ということはけんかをしないと、対立しないということとはイコールではないと思うんですけども。とにかく、まっ、まっ、まっで人と人がいざこざを起さなければそれでいい。つまり、みな「自然に」同質のものであることが理想になっているらしい。高校出たばかりの若い女性たちのほとんどがそうだ、ということに私は驚いたのです。

それを越えた何か、一人一人の独自の価値というものに、どこでぶつかれるんだろうかというようなことに、だんだん私の、まっ、私も教員のはしくれになりましたものですから、関心が向いて来たのです。

で、さっき申し上げたような「なくてはならないものはただ一つである」ということに近寄せて申し上げますならば、南山短大では、いや、南山学園全体

ですが、人間の尊厳という理念が中心に掲げられております。人間の尊厳という言葉がですね、戦後50年の歴史の中で、庶民の間にそういう言葉が何か具体化したか、あるいは定着したかというところと全く内容がないと考えざるを得ないので。憲法や人権宣言、子どもの権利条約とかいろいろなものがあるけれども、それに掲げられている理念が実は言葉にすぎない。人間の尊厳ということが、一人の人の生活の体験の中で、これは人間の尊厳と名付けるより仕方がない、他の言葉では代えられないという体験があるかということしか、実はそういう言葉というものは成り立つということはないわけですね。一人一人全然別々でいいわけですが。というふうに、私は思っているわけですが。

そういうものが、自分の戦後の50年の中で、随分いろいろとじたばたしたけれども、あるかと問い詰めてみると、実はあいまいな形でしかない。あるいは断片的な形でしかない。

で、実はそういうことをちゃんとほかの方々とも討論して、経験を話し合っても、なんとか煮詰めたいと思いましたが、それはなかなか難しいわけです。南山短大の人間関係科というところでは授業をチームで、昨日ご覧になったかもしれないかもしれませんが、チームでやりますので事前の討論が大変なんですね。それで1時間半の授業をやるために討論を何日もやったり、といったような騒ぎでありますから、しばしばそういうテーマにぶつかって、本当に私は沢山の勉強をさせていただきましたけれども、そういうことを、もうちょっと広い場で出来ないかというふうに思っていたのが、マザー・テレサという人のことを考えついた基盤でございます。

ここで、ちょっと、人間関係科で私がやっていることのお話をしなければならぬんですが、私は、さっき星野先生がおっしゃって下さいましたけれども、もともとは芝居の人間であります。戦後、私は新劇に飛び込みまして、皆さんご存知だと思いますが、「夕鶴」という芝居がありますが、あれを最初に演出しました岡倉士朗という演出者が私の先生です。

岡倉先生が亡くなられてから後、私が「夕鶴」の演出を担当しました。その後、劇団「ぶどうの会」を解散した時に私は離れたわけですが。でも。

ですから、芝居というものの基礎訓練とか稽古の過程で人を見て行くというふうに訓練づけられて来ているということが、先ず一つございまして。ですから、からだごとことばの表現についていろんなレッスンを致しますけれども、最後に芝居をやることが多いのです。

それから、もう一つ申し上げなければならないのは、その人間がなんで芝居をやっていないで、こんな所にいるかということですが。これは、もっと個人的なことを申さなければならないんですが。

私は、子どもの頃に耳が殆ど聞こえませんが、言葉が不自由でありました。17歳まで、特に10代になってから17歳までは全然人の言葉が聞こえない

という状態でありまして。17歳過ぎてから新薬の投入がききまして耳が聞こえるようになったのですね。今こういうように、どうか、何とかへたな話が発言出来るようになりましたのは40代のなかばからです。ですから、まっ、やっと20年位になっているわけですから。

で、そういう個人の歴史がありますので、障害を持った人々、特に言葉がうまく出ない人が声が出るようになる、あるいは言葉をしゃべれるようになる、人の顔を見れない人が人の顔を見て話せるようになる、そういうことのお手伝いをするということが私には、だんだん自分の仕事として大きくなって行ったわけです。

ただ芝居をやる、舞台上でいい芝居をやって、客にほめてもらうということだけではない。それよりも、そのプロセスで、例えば、どもりだった人がしゃべれるようになって来る。そういう役者が実際のいたわけですが、そういうことによるこびを見出す。

そういうことにだんだんのめり込んで来まして、まっ、さっき申しましたように林先生と出会う、被差別部落出身者たちの授業に入って行ったということとやってきたことを、こちらではかの方々、例えば、心理学専攻の方、神学専攻の方、哲学専攻の方、社会学専攻の方という方々につき合わせて討論をしながら授業をやって行くという中で、少しずつ学ばせていただいて来たということです。

で、何年か前にこういうことがあった。人間関係科には教員合宿ということがありますが。全部の教員が、といっても13・4人ですね。で、一緒になって3日位合宿して、その年間のことを反省し、次の1年間のことをどういうふうにやろうか、ということ进行讨论します。

その時に、竹内のレッスンは面白そうで、いろいろやってみたいけれども、なかなかそんなことをやっている時間は教員たちには取れないから、一番面白そうだから芝居をやって、芝居の訓練の中でレッスンを体験してみたいということをお勧めされた方がいらして。でまっ、芝居なんてって言うておじけづいた方も勿論いらっしゃるわけで、いろいろあったんですが、とにかくやってみようかということで、私、計画を考え始めたんです。

はじめは1年位でやるつもりで。ところがいくら考えてもね、台本が見つからないんです。この本はいいなと思ってもね、誰にこの役をやらせようかなと思いだすと、この役をやるためにはどれだけ稽古をしなきゃいけないか、うーん、これはだめかなと思ったりね。あの先生たちには、ひょっとしたら、恋愛物やらしてね、キスシーンでもやらせてしまおうかというようないたずら心が出たり。そうすると、学生たちは喜ぶだろうなと思ったりするんだけど。さて、これ稽古が大変ですね。

いくら考えても、1年たってダメ、2年たってダメ、3年目位にね、もうこれは止めようかどうしようかと思った時に、昨日ご覧になったかもしれませ

んけれども、正面玄関から二階へ上がって行くところの階段の踊り場にマザー・テレサの写真があります。あれは、マザーが南山講堂に来られた時に、書かれた色紙が一緒になっている。2枚の写真があつて。あれを時々ながめていて不思議な気がしたわけですね。

マザー・テレサという人のことは、聞いたことはあるわけですが。一枚の写真を見ていると、非常に優しい顔をしていらっやって、あつたかくて、これはすごい人だなと思うんです。けれどももう一方ではね、非常に不思議な気持ちがある。あの見開いた目がですね、私たちとか人間を見ているという気がしないんです、私にとって。何かもっとずうっと違うものを見ている。別に相手を見ていないというんじゃないかもしれませんが、見ているんだけど何か違う。違うものを見ているという感じが私はしたわけですね。で、その顔を立ちどまって見ていることがだんだん多くなって行くうちに、この人を劇に取り上げれば、皆で、自分で考えてみるきっかけになるんじゃないかなと思ったのです。

それで、マザー・テレサの話に入りたいと思いますが。最初に、上演した時のことをお話しておいた方がいいかと思ひます。

教員はかなり沢山で、人間関係科の教員はあらかじめ出演しました。それから英語科の教員の方もお二人、外人の教員の方が3人。その他にこの本をご覧になればわかりますが、最後に出演者全員並んでダアッとしゃべるところがあるんですよ。その中に、ちょっとこれ見ていただくとわかりますが。112ページを開けて下さいますと。

最初のところに、「マザー・テレサは去った。」というふうに書いてあります。「飢えと貧しさが、即ち彼女にとってはキリストが、世界の片隅から彼女を呼んでおられるから。だが、呼ばれているのは、彼女だけではない。」というふうになって、全員がダアッと一言ずつしゃべりはじめるわけですね。

それで、113ページのおしまいに、「キリストに呼ばれているのはマザー・テレサだけではない。」ともう一度出てくる。

次の115ページに‘間’とあつて、「わたし。」「わたし。」「わたし・・・」とこうつながる。そうしたらA・Iの先生が、フィリピナスさんかな、「わたし。」なら私も言えると言うんですね。『「わたし。」だけなら出られるよ!』と言うんです(笑い)。「わたし。」だけ言う人が何人か出てこられた。そういう形になって大勢の方が出た。

それから職員の方が何人か出て下さいました。中には看護婦さんもおられたし、事務職員の方もおられました。事務長さんの補佐の方になるのかな、課長さんですか、前に大学時代芝居をやったことがあるという人がおられまして、是非出たいと言ったんだけど、突然の転勤で出られなくなって。最後のこの1場だけ出るということで、一言しゃべって転勤して行かれた方もいらっや

います（笑い）。

それから学生が — 率直に言うと教員、事務員だけでは到底出来ない、私の授業をとっている学生が20何人、30人ぐらいでしたかね。30人ばかりがこれを支えましてシスターの役は全部彼女たちがやって。ところが集団的な動きがかなりありますので、それだけでも足りなくて、学外で私は東京と名古屋でワークをしておりますけれども、それに出ている人たちが10人近く、自分たちも参加したいということでやって来ました。その人たちの中には札幌から来た人もいるし、京都、大阪もおります。東京からも勿論来ているわけですが、そのような人たちが大勢集まってやった。

これは、ま、**「全学で取り組む。」**と言われた学長のお力でありまして、そういう形で一つのことが出来たということ、先にお話しておきたいわけです。

で、その上でマザー・テレサの話に入ることになりますが、マザー・テレサその人について私が申し上げるとするのは、大変おこがましい話でありますし、皆さんの方がお詳しいかとも思いますので、私がどういうことに惹かれたかということだけ、お話をしたいと思います。

第1は、ちょっと恐縮ですがもう一度開いていただけますか。5ページをお開きいただきますと、「無言。スライドなし。暗黒。ひとりの少女が祈っている姿が浮かび上がる。」というふうに書いてあります。

この少女がアグネス・ゴンジャ・ボヤジュ。この発音が非常に難しく、えー、随分調べました。数年前に民族間の衝突があって、当時有名だったスコピエで生まれ育った。ここは、カトリックとギリシャ正教、イスラム教、いろんな宗教が交じり合っている、ということは、さまざまな民族が入れ混って対立も激しいということでしょう。

そこで、12歳の時に、神父さんからインドの話を知って聞かされたわけですね。で、ここに書いてあるんですが、はるか東、海を越えた遠いむこうにインドという1年中暑い国がある。そこで貧しい人々が飢えて、病んで、死んでいく。そこに神父さんの仲間が行ってキリスト教の教えを述べ伝えて、貧しい人々を助けているという話を初めて聞く。

で、その時に彼女は自分もそのひとりになって行きたいなということを思い始める。

そして、18歳の誕生日の頃、彼女は、改めて、家を離れて、一生を神に捧げようと決心して、パリを経てアイルランドのタブリンに行って、ロレット女子修道会に入るわけです。ロレット修道会が当時インドへミッシヨナリーを派遣していたのです。

そこで訓練を受けてからインドへ行く。まずダージリンのロレット修道会の修練院へ行きます。2年後にシスター・テレサとなってカルカッタの修道会経

嘗の高等女学校で地理と歴史を20年近く教えていたわけです。

そこまで言えば、彼女の12歳の時に志したことは、そこまでまっすぐつながって成就して行くわけですね。

ところが、大きな変動が起こる。それは、なんと申したらよいのでしょうか、神に呼ばれるということ、お召しを受けるということばを使うのが良いのですが、私にはその言葉はたやすくは使えません。今は、いくつかの、私から見てのステップについて述べたいと思います。

まず第1に、カルカッタのロレット修道会の周りはスラムであったということです。

で、スラムの中へ行って、貧しい人々を助けたいという希望を彼女 — だけではなかったようですが — が修道会に申し出たことがあるようです。でもその時には許されなかった。

それから、戦争が激しくなって来まして日本軍の爆撃なんかがありますね。そうすると難民たちが修道会の中に逃げ込んで来るわけです。怪我人もいるでしょうし、病人もいるでしょう。その人々を世話している。その壁一つ外は焼けたり打ちこわされたりもしているスラムであるという状態の中で、彼女は何を感じていたのであろうかということを思い見るわけです。

で、スラムというと、日本でも各地で思い浮かべられる風景であります。昔から被差別部落と呼ばれてきた地域にもありましょし、閉山した炭坑地帯、あるいは都市の中の日雇い労働者の集まる地域などがあります。そこで働いておられるキリスト者が沢山おられますが、カルカッタのスラムはとりわけさまざまじょうです。私は、写真や映画や小説で知るばかりですが、敗戦後の焼け跡によりかたまったバラックでの暮らしを思い起こしますが。

第2には、戦争が終わった後で、カルカッタには大変な事件が起こったということです。ご存知の方も多いただろうと思いますけれども、イスラムとヒンドゥ教徒がイギリスからの独立をめぐる対立して遂に暴動が起こります。

「ガンジー」という映画がありまして、その中にカルカッタ大暴動 — 虐殺と呼ばれますが — のシーンがありました。町角から町角、屋根から屋根と伝って行って、大勢が戦い合い、殺し合い、そして火がつく。何千人が死んで道傍に転がっている。その時に、この台本にも書きましたけれどもマザー・テレサは、校長として、他の職員は逃がしもしたけれど、自分は学校に残っていた。300人の学生に食料がない。難民もひょっとしたらいたかもしれませんが、その人たちの為に食料を調達するので、その暴動の中をあちこち走り回らなければならなかった。

突然、奇妙なことを思い出しました。マザー・テレサの苦勞とは比べものにならないのですけれども、ちょうど同じ時期、私たちも飢えていた。私は寮で

委員やっておりますね。食料調達が大変だったんです。第一高等学校というところは、先輩に内務官僚が多かったから、いろいろな手づるをたどって、1000人の食料をみつけようとする。ですが、実際問題として‘無い物はない’。

とにかく凄まじい飢えでありまして。ここで申し上げるのはちょっと恐縮な話だけれども、とにかく大豆しか入らなかった時がありました。何ヶ月も大豆をふかそうが、いろいろが、粉にしようが大豆のほかになにもないと。女の方が多いので恐縮だけれども、殆ど全員が下痢しちゃうんですね。そうすると、便所がたちまち使えなくなっちゃう。庭に穴をたくさん掘るんですが、何日かで、またみんなダメになる。また穴を掘る、また穴を掘るというような状態でありました。そういうようなことを思い出したりすると、マザー・テレサの、当時のあせりというか怖さが少しわかる気がしたのです。

そういう騒ぎの中で何千人が死んで、火が燃える。スラムも確かその時燃えたと思いますが。そのさなかで見聞きして彼女の中に何が培われたんだろうかと思いました。

その一ヶ月後に、ダーズリンの修練院での黙想会に参ります。私は写真でしかその車は見えていない、実際に乗ったことはないんですが、3両連結位のちっぽけな、トコトコ、トコトコというような車のようです。それに座って、じっと一人でおられた時、突然、神の御声を聞いた。一言で言えばそういうことです。

この内容については、彼女は何も語っていません。資料によっては、この時こういう言葉が神から発せられたと具体的に述べている資料もありますが。人間の日常使用する言葉で、きちっとこう伝えられた、ということとは私には思えませんので、私は具体的なことばとしては台本に出しませんでした。しかし、その時にはっきりとお召しがあった。

私はそのことをはじめて読んだ時に、これは芝居にならないと思ったんですね。この瞬間が彼女にとって人生において最大の瞬間だ。彼女は12歳の時に、あるお召しを感じた、あるいは呼ばれていることを感じた、殆ど無自覚であっても。そうだとすると、それからインドへまで来てずっと働き続けて来たということは、その呼ばれた声に従って生きていたことに違いない。ですから、このままでずっと生きて、それで終わっても彼女は呼ばれた声に従って行ったということになると思うんです。

それが、この瞬間に、何と言ったらいいんでしょうか、熟したというんでしょうか。破れたというんでしょうか。そこでくっきりした新しい体験になったというか、それが来た時に、彼女は全く新しい人になる。

マザー・テレサがマザー・テレサになった瞬間、ここからすべてが始まる瞬

間ということがそこにありまして、それから後は、もう彼女はそのお召しに従って行動した、ということしかないわけですね。

で、その後大変な苦勞が資料を見ればあるわけですが、それはしかし、彼女にとってみれば苦勞とか何かという問題ではないのであって、ただ、ひたすらに歩いてただけであろうというふうに思うのです。

普通の意味で人間的なドラマを作ろうとすれば、その後の苦勞を書けばね、いくらでもテレビドラマ風にいえば素材はあるわけですよ。

しかし、そういうことをいくら書いても、それはどうも、面白いストーリーにはなるかもしれないけれども、本質的なドラマにはならない。何か全く違うことであるということを感じたわけです。ですから、その時に、この計画を止めようかとも思いました。

その時、ちょっと話はそれますが、こういう話を連想したわけです。

これは、キリスト教ではなくて、仏教の方の話ですが、今昔物語という古い物語がありますが、その中に「源太夫出家のこと」という話があります。

どういう話かという、あの、大変な暴れ者というか、ま、山賊みたいなものですね、リーダー格の男がいるわけです。ものすごい暴れ者でね。1日のうちに人の骨を折らない、あるいは首を切らない日は1日もないと、そういう言い方をしてありますが、で、手下を連れてあっちこっちへ行って襲っては金品を強奪して来る、人々に大変恐れられた男であった。

それが、ある日、手下を連れて山から降りて来たところが、お堂の前に人が多勢集まっている。これは何だと聞いてみたら、聞かれた人はガタガタ震えながら、いや、今、都から偉いお坊さんが来てお説教をしていらっしゃると言う。「ほう！ 坊主の話を聞くと、何か功德があるのか。」 「それは、もう、えっらい坊主ですから、とても有りがたいお話が聞けます。」とかなんとかと言うわけです。

「それは、面白い。」彼はいきなり、お堂の中にズカズカと入って行く。集まった人々はみんなびっくりして逃げ惑う中をまん真ん中に行き、お坊さんの真ん前にドッカーリ座った。ま、刀もさしているでしょうし、ひょっとしたら薙刀あたり持っていたかも知れない。ズガッと座って「ヤイ、坊主！ 俺にもわかるような話をしろ」と怒鳴るんですね。

坊さんの方がぶるっちゃってね。「ちょっと、ちょっと待ってくれ。」と言うんだけど、「俺みたいに、殺生ばかりして何もうからん者にもわかるように、ありがたい話を聞かせろ」と吼える。

で、坊さんがガタガタ震えるけれども、仕方がないからお説教を始める。とにかく「西の方に、浄土というところがあって、そこに阿弥陀様という仏様がいらっしゃる。この世でどんな悪いことをしたり、人殺しをしたりした者でも手を合わせて、南無阿弥陀仏と言えば、その仏様がちゃんと救ってくださるのだ。」

と、こういう話をした。

そうすると、乱暴者の頭が、バツと立ち上がって、坊さんの胸倉つかんで、「それは誠か」と言うんですね。

「ま、ま、誠にでございます。」と坊さんが答えると、彼は、いきなりむずっと座って、坊さんに「俺の頭を剃れ」と怒鳴った。「俺は今から出家する」と。

さあ大騒ぎ、坊さんは「そういうことは、もっと皆さんにご相談なすってからにしたらどうですか。」というわけです。

そうすると、彼はかんかんに怒る。「何を言うか、お前は今の今まで、南無阿弥陀仏と唱えて、本当に信じれば仏さまが浄土に迎えて下さる、こんな有り難いことがあろうか、と言っていたではないか。あれは嘘か。お前が言った通りのことをしようというのになんで邪魔をするのだ。」

坊さんは震え上がってどうしていいかわからない。すると、いきなり刀を抜いて自分のもとどりをバサッと切っちゃうわけですね。「さあ、剃れ。」

周りにいた連中がみんな逃げだす。外に待っていた彼の手下たちが、何が起こったのかと刀を抜いて飛び込んで来るという大騒ぎになる。

そうすると彼は、「いやいや、騒ぐな。」とみんなを静めて、「俺は今日から仏さんの弟子になる。もう今までやったことは全部捨てる。自分が持っていたものはみんなお前らに分けてやるから、今からどこへでも好きなところへ行け。わしは、ひとりで出かけるんだ。」と言い渡すんです。

しょうがない、坊さんは震えながら頭を剃るわけですね。そうすると、その場で全部着物を脱いじゃって袈裟をもらって着て、数珠をかけて、チーンとたたたく鉦を持って、それで、「やい、坊主」（ここがおかしいんだけど）「やい、坊主、西の方へ行けばいいんだな」と言う。で、とにかく、チーンとならしたと思ったら西の方を向いてまっすぐに歩き始めた。「阿弥陀仏よう。ホーイ、ホーイ。」チーン。西へ歩き始めるんですね。川があろうが森であろうが、とにかくまっすぐ西へ西へと歩いて行く。

それで、何日かたち、その後、その土地では行方知れずということになるわけですが、どんどん、どんどん歩いて行く。ある時、庵をむすんでいる坊さんのところへ彼が立ち寄るわけですね。それでまあ、粥か何かを布施してもらい、また西へ西へと行く。

その時、「あと7日たったらば、もしよかったらば見に来てくれ。」と言い置いていった。

で、7日たって坊さんが後を追って行ってみると、海岸べりの断崖絶壁の高い木に登っている。その木の二叉のところに彼が座って、鉦をたたいて、西の方、つまり海に向かって、チーン、「阿弥陀仏よう、ホーイ、ホーイ。」と繰返している。そのうちにザー、ザーと海の潮なりがしている中から「ここにありー」という麗しい声が聞こえた、というふうに書いてあるんですね。

そうして、「阿弥陀仏よう、ホーイ」と呼んで、呼んで、呼び続けてついに

彼はそのまま木の上で絶命する。すると彼の口から麗しい蓮華の花が1輪咲いた。こういう話です。

私はキリスト教の文献にくらいですけども、ラーゲルレーヴの「キリスト伝説集」の中に、イタリアの暴れ者が十字軍に参加してエルサレムのキリストの墳墓のみあかしの火を、ただ一人で馬に後ろ向きに坐って風から防ぎながら、強盗にあっても嵐にあっても守りつづけてフィレンツェの大聖堂まで運びとどける話があるのを思い出します。

私は一生の大事ということは、こういうことだろうと思うわけです。ある一瞬にその人はその人になる。その瞬間がそれぞれの人にあるに違いない。それを掴むか、掴まないかというのはその人の器量とも運命とも、あるいは恩寵とも言われるようななにかであるけれども、多分呼ばれているということは、どんな人にとってもあるであろう。私も呼ばれているだろう、か。と私は、思いをかえすわけでありませぬ。

つけたして、つたない連想だけ申し上げます。12歳のゴンジャが18歳になってパリからダブリンへ行って、それからカルカットへ行く。彼女としてはインドというところは、どういうふうにして、どう行くかも何も分からずに一つ一つ辿って行ったに違いないわけです。

そう辿ってゆく道は、お笑いになるかもしれませんが、私はアブラハムが故郷を離れて、ずうっと旅をして行く、どこへ辿りつくかわからないままに、途中で父をなくして、なお、また更に旅を続けて行くというようなことと重ね合わせて思ってみたりするわけです。

それが、ある時に、ロレット修道会を離れてスラムに入っていくということを法王庁に申請をして、2年待つわけですね。それで、ついに正式の許可が降りるわけですが。キリスト者でないものが勝手な連想を重ねて行くわけで、お笑い下さって結構ですけども、アブラハムはイサクを神に捧げる覚悟をする。どのようにマザーが、それまでの仕事を自分の命より大切になすっていたかということは、私にはよくわかりませんが、しかし、ロレットは自分にとって、家や故郷とは比べものにならない、一番大切なものだったということは言っておられる。それを捨てる。そういうようなことを思い比べたりなんかするわけです。

第3になりますが、資料を読んでみまして、私が非常に胸をうたれたことは一本当にこれは、皆さんから言ったら何をとおっしゃるようなことなんです。が、御聖体をいただくということですね。このシーンの彼女の言葉は、私は2つか3つの言葉を組み合わせて作ったのですけれども。

70ページをちょっとお開けくださいませんでしょうか。

マザー・ハウスの朝4時半というところがあります。で、「キリストなしでは何もできない。」というふうにマザーが言う。これは勿論、御ミサの時に実

際に言っているということではありません。「私は毎日キリストとお会いする。」と言われる。「朝の御ミサで、パンの形でキリストをいただく。」その時に、「キリストと結ばれる。聖なる交わり、聖なる一致。」というふうに言っておられる。これは、言葉でいうと、前後がかわっていたり、他の言葉と組み合わせたりしているのですが。

で、「仕事では肉と血の外なる形のもとに、同じかたを見出す。同じキリスト。」というふうに発展します。

この「パンの形でキリストをいただく。」ということが、「キリストと結ばれる、聖なる交わり」であるという言い方を彼女の言葉で読んだ時に、私は初めて聖体を拝受するというこの意味が、からだの中に入って来たような気がしたんです。

ヨハネの福音書の6章の「人の子の肉を食べ、その血を飲まなければ、あなたたちの内に命はない。」という一句は私にとって長いこと考え続けていることです。一つには私がカトリックを知らなかったからでありまして、それがカトリックの信仰の核心なのだとすることをだいぶ後で知ったのですけれども。

だいたい、南山短大に参りましてね、ピオ館、あの中にお御堂があります。その前に行ったら、「この中に御聖体があります。」と書いてあったんですね。聖体って何じゃろな、何があるんだろうと中に入ってあっちこっち見ても何かわからなくて帰って来てしまった、というくらい無知な人間でありましたから。

しかし、後で「砂漠の修道院」という本を、山形孝夫さんという方が書かれたのを読んでみると、あれはコプト教の人たちですけれども、砂漠の中に庵みたいなのがあって、そこへ山形さんが行っているいろいろな質問をすると、私たちはキリストのおからだをお守りしているんだと言う。

はてね、キリストのおからだって何だろうって、彼は考える。はあー、わかりました、パンのことですね。というと、パンでないって言われるんですね。いいえ、言い間違いました、キリストのおからだのシンボルとしてのパンでございますね。そうではないって、また怒られる。何遍か怒られて、彼はやっど、はあ、そういうことではないんだ、というふうにだんだん納得して行くところが、その本の中にありますけれども。それは私にはよくわかる気がしました。そのキリストのおからだということ、それと、それをいただくことによって一致するっていうことが、ぱっと火がともったように私のからだに入ってきた。

こう申すと、誤解されると思いますけれど、私、ある意味でエロチックなまでの感じをもって受け取ったのです。

あぁ、キリストの花嫁っていうことは、そういうことなのかなあ……。大変な誤解かもしれませんけれど。しかし、私は、からだのことをずっと考えて来ましたので、ある生々しさを持って私のからだに、その言葉が、さあっと入って来たという感じがしたのです。なるほど、そうか、キリストの花嫁っていう

のはそういうことなのか。それならば、彼女がね、何処へ行って、何をしてもその先にキリストの御姿を見て、それでひるむこともないし、むしろ苦しみを喜びとする、ということが有り得るだろうというふうに、始めてその時に思ったんですね。

これは、私の大変な誤解かもしれませんし、何年か経った時に、あの言葉は取り消さして下さいと申し上げることになるかもしれませんけれども、私はこれで、とにかく、台本を書こうと思ったのであります。

で、やっぱりここから後のマザー・テレサという人は、すさまじい人だと言えばすさまじい人なんですけども。人と言っていいかどうかよくわからない。それは、彼女を動かしているものが、ふつうあの人すさまじい人だと言う場合のように性格とか志とかというものだ、というふうには私には全然思えないものですからね。それから先の事件は、だから、普通の意味で人間的なドラマにはどうしても、さっきも申し上げたように書けない。だったら、どういうことをしたかということ綴って行くことしかないというのが私の感じであります。マザーは、昨年も具合が悪くて倒れて、そしてまた回復して中国まではじめて行かれる、といった活動を続けておられますが。

ただ、私が書こうとして一番困りましたのは、インドの人たちがマザーをどう見ていたかということがよくわからないんです。

私は、日本人として、敗戦国に育ったというか、青年期を暮らしましたから、まわりの仲間はキリスト教の信仰に入った人たちもいるし、マルキシズムに行った人もいるし、アメリカに留学した人もいる。ずうっと見ていてね、率直に言って、どうしてもそれについて行けないということが一つあったんですね、やっぱり。日本人が日本人の中で、日本人の、何か今までこれがだめだったというものはっきり見極めたい。そうしたらそれをひっくり返す形で出発しよう、というふうに思いきめていたところがあります。ある意味でナショナリストだったのかもしれませんが。そのことをいまだに引きずっているわけでは必ずしもありませんけれども。しかし、その当時、外にあるすばらしいものを見て、それに従って行くことで、何とかなろうというふうにならなかつたということが戦後の出発にあるわけです。

その自分の体験と、インドの人のイギリス文化に反対するいろんな反応を重ね合わせて見てみますと、キリスト教というものが入って来た時、インドの人たちはどういふ反応をしたか複雑な思いで想像するわけです。インドの教会に行くと、えっ、これがカトリックの教会なのと私なんかびっくりしますけども、日本の教会と雰囲気はまるで違いますよね。

とくにヒンドゥ教の人々から見て、ただ寄り集まってみんなでお祈りしているというのなら、まあいいかもしれないけれども、どんどん町に出て来て、倒れている人々をね、運んで行って、というようなことになって来ると、一体

どういう感じだったのだろうか。どういう反発をし、あるいはどういう共感をしたんだろうかと。これはととっても難しくてわからないわけです。資料がないんですね。一つの例だけは、書きましたけれども。

ヒンドゥ教徒の聖地を「死を待つ人々の家」というふうにしてカトリックの人たちが入って来たことに対する反発はすごいものだったわけですが、そういう反発がどんなふうであって、それに対してマザーがどう向かいあって行かれたかを知りたかったのですが、十分にはわかりませんでした。

ただ、彼女が、亡くなって行く人たち一人一人に、最後にお葬式をする形の希望を聞くわけですね。ヒンドゥ教の形で葬ってほしい人にはそうするし、イスラムの人はイスラムの儀式に従う、という形をとられた。インドという風土を彼女はしょいながら、その中で働いていかれる。全く外国から来た人ですからね。外から来た人が中に入り込んで行くということの難しさというものを、どういうふうにして行かれたか、ということについて知ったことは非常に不十分でありまして、そういうことすべてを、とにかくみんなで考えてみようということで台本にまとめて上演した。そこまではいいんですが、それが、出版されたりなんかしてくると大変おもしろいんですけども。しかし、このような形になったのはありがたいことだと思います。

マザーのことからちょっと離れますけれども。マルチン・ブーバーというユダヤ系の哲学者がおります。人間関係科では、ブーバーの『我と汝』という本の講義がずっと、以前の学長の時代からずっと続いているわけですが、

ブーバーが、これはユダヤ教の方で、ハシディズムという一派、ユダヤ教中の革新派ですね、それについて紹介する文章の一番最初にこういうエピソードを書いております。

ロシアの帝政時代の話ですが、ユダヤ教の師であった人が憲兵隊につかまってしまうんです。長官が尋問に来るわけですね。いろんなことを話してるうちに聖書についての疑問を持ち出すのです。

で、最後に彼がこういう質問をする — パラダイスでアダムが神が来られることに気がついて隠れますね。すると神が「あなたは何処にいるのか」と聞く。神は全知全能であるはずだ。だれが何処にいるのかぐらいは知っているはずである。なんで「あなたは何処にいるのか」と聞くんだ、お前はそれにちゃんと答えられるかと長官は言う。すると、師は、まずこう言います。バイブルは永遠であって、いかなる時代、いかなる種族、いかなる人間も、その中に含まれていることを、あなたは信じますか。すると長官は信じるとも、と言う。そこで師は答える。 — 「神は、どんな時代にも全ての人に呼びかけ給うのです。」

「あなたは、あなたの世界の中で、どこにいるのか、一生の間どんなふう歩いて来て、今何処にいるのだ。46年生きて来たあなたは、今どこにとどまっているのか。」

長官は46歳だったのです。聞いた途端にハッとしてね、心臓が震えた。それで、ブラボーといって師の肩を叩いたんだけど、ガタガタ、ガタガタしていたと、こういう話を彼は紹介しています。

今日、こういうことをして、こういう本をまとめて、こう考えているという話をするということが、だんだん、恥ずかしく思われて来ましたが、
「あなたは何処にいるのか」という呼び掛けを、これから胸に刻んで、皆さん方の後をついて学んで行かせていただきたいというふうに思っている次第なのです。

長いこと、ありがとうございました。

司会：ありがとうございました。もし、どうでしょうか、先生方の中で何かお話ししたいことがございましたらと思いますけれども……。

質問：時間がオーバーしているので恐縮なんですけれども、10何年か前から先生のご本が大好きでよく読ませていただきましたけれども、7・8年前にカトリック教育学会というのがありまして、その機関誌に「子どものからだとキリストのからだ」というタイトルで、小さくならない論文を書いたんですけれども。その時に先生のご本を最初に引用させていただいて。先生が子どものからだということを非常に問題にされていて、そしていろいろ教育されていらっしゃるということが頭にあったものですから。それとキリストのからだ。今日、先生がおっしゃったご聖体との関係で私なりにちょっと考えたことなんですけれども。今日のお話の中で先生が聖体についてふれられたので私も感銘したんですけれども。あの、現在の子どものからだということとマザー・テレサのいうキリストのご聖体ということ。何か、そのことについて先生、今の段階で、何か結び付いているか、もし、おありでしたら……。

竹内：直接には、今、すぐ言葉がうまく出て来ません。ただ、今、思いますことは、子どものからだを見て一番思うのは、口がだんだん開かなくなっているということです。しゃべる時に口をほとんど開けないでしゃべる子がどんどん増えている。唇を開けるけれど、歯の間をほとんど開けない子が増えている。

それは、息を外へはきだしていないということですね。声がどんどん小さくなっていく。

そういう子が大体行儀もいいし、学校の成績もいいし、問題のない子とされているわけですね

さあどうなんだろうと。そういう社会的現実の中にいる子どもたち。これをよしとする教育の中に子どもたちのからだがある。私の言い方ではからだが増えなくなっていく子どもたち。それとイエスが「この子どもたちようにならなければ

ば」と言われた子どものからだは、一体どういうふう違うんだろうか。子どもたちの中にイエスが言われた子どものからだを見るというか、そういうようなことは考えております。

その辺の話をするると延々と長くなりそうなので、お答えになりませんが御勘弁下さい。

あの、そのお書きになった文章を私は存じませんので……。読ませていただければありがたいと思いますが。

司会：それでは、先生の講演をこれで終わりたいと思いますので。どうも、本当にありがとうございました。



